

研究ノート

「紫藤の滝」の呼称が定着していく過程

—菅公伝説と虎麻呂伝説との狭間で—

小鹿野 亮

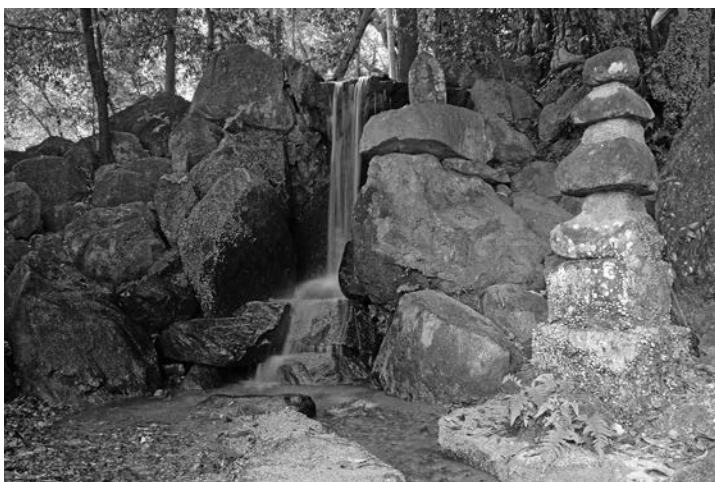
1 はじめに

菅原道真公が、讒言によって大宰員外帥として都から左遷されたのが延喜元年（901）。各地に残されている菅公伝説のなかでも著名なのが、天拝山での物語である。菅公が、自身の無実を訴えるために百余日間、麓の滝で身を浄め、山頂の岩の上で七日七夜祈り続けたところ、天から天満自在天神と書かれた尊号が届いて、願いが成就したとされるものである。

しかし一方で、天拝山麓における菅公伝説の定着については、伝説という側面から史料は少なく、観光的側面以外にその経緯を顧みることは少なかった。そのなかで、現在、武蔵寺や御自作天満宮の傍らにある「紫藤の滝」と呼ばれる小さな滝の呼称については、実は、近世～近代の史料をみても一定ではなかった。むしろ、時代によって変化している点が認められる。このことから、それらの変化とその契機について考えてみようとする試みが、本稿の主旨である。



現在の「紫藤の滝」周辺（左手に衣掛石）



現在の「紫藤の滝」と「古石塔」

2 江戸時代における「紫藤の滝」の認識

筑紫野市の武蔵寺に伝わる『筑前国御笠郡武蔵村椿花山武蔵寺薬師如来縁起』（以下『武蔵寺縁起』と略す。）は、江戸時代にまとめられた武蔵寺の創建に関わる物語の記述である。『武蔵寺縁起』の本文は、第七世武蔵寺座主の是心院定応によって修彩されたものの写本で、松尾山弥（光昌）によるものと伝えられる。

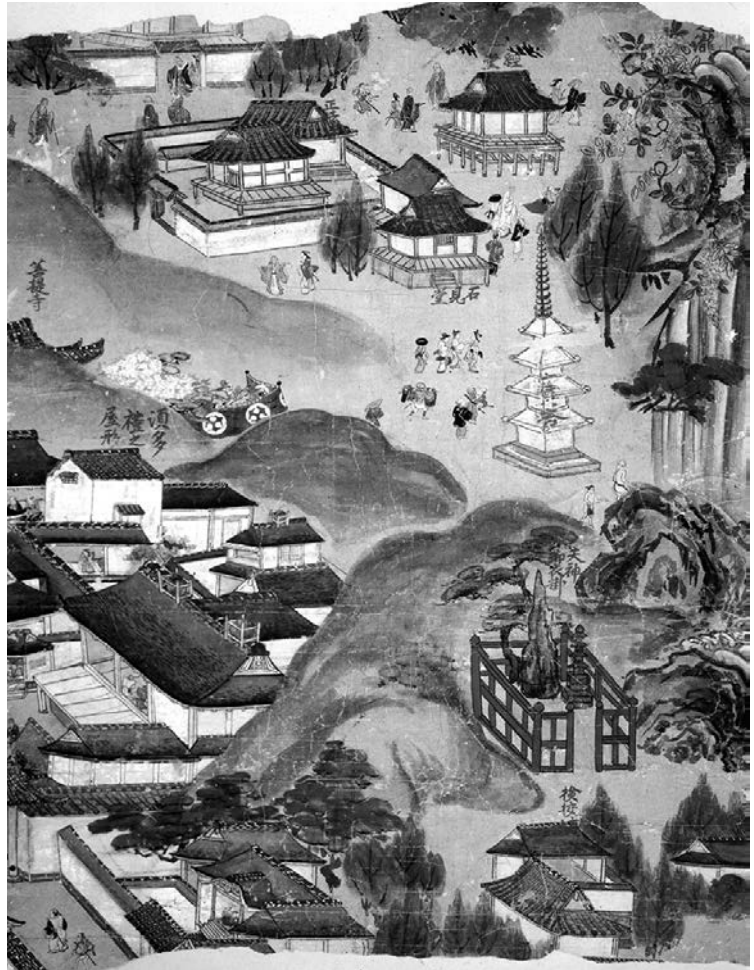
定応は、元文5年（1740）～明和2年（1765）の間に武蔵寺での地蔵会の導師を勤め、天明3年（1783）に没していることから、『武蔵寺縁起』はその間に作成されたものと推測される。書写の年代は、明治維新以降に中断していた武蔵寺の地蔵会が再開された明治16年（1883）頃と推定されている（渡辺1998）。

このなかには、「（武蔵寺の^{※筆者註}）釈迦堂の前に数丈の瀧あり。水勢漲り走りて、岩崖玉を飛すて、

虎麻呂、我姓に擬らへ、紫藤を瀑布の上りに植ゑて、此堂塔の盛衰は此藤の榮枯にあらんと誓ひ給ひしと申し伝え侍る。其藤今纔（わずか）に残りぬ。所謂釈迦堂は、今天拝山の拝殿建立の処なり。菅公此山に登りまして天に祈り給ひし時、此瀑布にて沐浴し給ひしに（自ラ尊像ヲ刻ミ）、此瀑布の形勢を漢土の龍門水に比して龍音水と名付けたまふ。瀑布の辺に天神御衣を脱て掛け給ひし石、今にあり。衣掛石と申伝え侍る。（※筆者傍線）」と、「瀑布（滝）」と「紫藤」、「菅公の衣掛岩」が基本的なセットとして記述されている。

この『武蔵寺縁起』に依るとされる『武蔵寺縁起絵図』（以下『縁起絵図』と略す。）第一幅と第五幅にも、前記の記述が部分的に描写されており、境内の様子が描かれている第一幅には、「天神御衣掛」の岩、そしてその横に四重の層塔、藤の花が咲いた滝が描かれている。滝が周囲の地物よりも比較的大きく描かれており、その上部に「■（之カ）瀧」との朱書き文字の記載が認められる。注記による滝の名称については定かではないが、衣掛岩（現状のものとは形状を異にしており、その形状は薬師如来の板碑に近い。）・層塔・瀧・藤がセットで描かれていることが特徴である。

また、第二幅、第三幅、第五幅が同じ作者によるものと推され、第一幅とは制作年代が異なっている可能性もあるが、第五幅の右上には、武蔵寺創建に関わる藤原虎麻呂が遺言するシーンの次に「紫藤カ瀧」「麻呂於此地植紫藤誓曰薬師仏地之盛衰者此藤在榮枯」が描かれており、基本的には『縁起』本文の内容を踏襲したものとなっているものの、元々、縁起の本文には「紫藤を瀑布の上りに植ゑ」たことしか記述がない。書写年代からみて「紫藤ガ瀧」という呼称が当初からのものであったかどうかは不明で、紫藤の滝と道真公が禊ぎをした滝は別々に描かれていることから、全く別のものとして認識されていた可能性もある。ただし、『縁起絵図』では、菅原道真



『縁起絵図』第一幅の滝（右上） 武蔵寺所蔵



『縁起絵図』第五幅の菅公垢離の図 武蔵寺所蔵

公がこの滝を漢土（中国）の「龍門水」に対比して「龍音水」と名付けたという事柄は、欠落してしまっている。

『武蔵寺縁起』、『縁起絵図』の記述は、江戸時代における『筑前国続風土記』（以下『本編』と略す。後掲〔史料1〕）宝永6年（1709）、『筑前国続風土記附録』（以下『附録』と略す。後掲〔史料2〕）寛政5年（1739）、『筑前国続風土記拾遺』（以下『拾遺』と略す。後掲〔史料3〕）天保6年（1835）（何れも成立年代を示す。）の内容でも基本的には踏襲されており、「龍王瀑布」（『拾遺』では「龍王瀧」と呼ぶ。）の傍らに菅公伝説による「衣掛岩（石）」があり、滝下の「神池」（『附録』のみ）のなかに大僧都信聰が造立した正平20年（1365）の漢詩を刻んだ「三重石塔」があるということが共通する認識として記されている。

『附録』の挿図には、武蔵寺と天拝山の図が記載されており、現存している薬師如来の梵字板碑を「虎磨長者ハカ（墓）」と記しているなど錯誤と思われる点もあるが、「衣掛石」の隣地には「龍王瀑布」と記載されている。

3 近代以降の「紫藤の滝」認識の推移

それでは、これらの江戸時代を通じての基本認識は、近代を通じてどのように変化していったのであろうか。

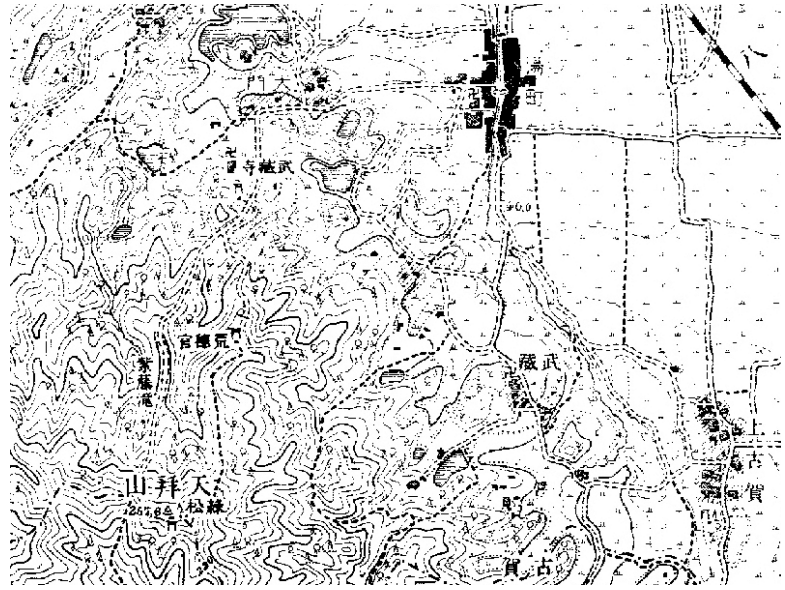
まず、明治5年（1872）に編纂が始まり8年掛けて刊行された『福岡県地理全誌（五）』（後掲〔史料4〕）には、「龍王瀧」⁽¹⁾という名称による記載があつて、「紫藤ノ瀧ともいう。」と付記して説明されている。

また、明治23年（1890）の匹田幸賀著『汽車乗客便覧－第一編九州鉄道博多久留米間－』（後掲〔史料5〕）では、「○龍王ノ瀑布 武蔵寺ノ側ニアリ菅神衣掛ノ岩アリ。」とのみ記され、明治26年（1893）の岡本武平著『九州鉄道旅客の手引』（後掲〔史料6〕）でも、「○天拝山（中略）は、此山は即ち菅公の左遷され玉ふ時、麓の瀧水にて行えおなし山上の石に登りて天を拝して其罪なきを訴へ玉ふたる所なれば、後世天拝山の称を呼ぶと云ふ。（以下略）」との僅かな記載のみとなっている。今でいう旅行ガイドブックのような性格であることから、記載が簡便になっているものと思われるが、「龍王の瀑布・（天拝山の）麓の瀧水」＋「衣掛の岩」という基本的構成要素は網羅しているものの、その詳細が記されていない。

これに対し、明治31年（1898）の『福岡県名所図録図絵』所収の「福岡県筑前国筑紫郡二日市町大字武蔵温泉場及 天台宗椿花山武蔵寺境内之図」（銅版画）では、比較的詳細に記されている。天拝山中腹の滝については「行者瀧」、「菅公衣掛石」の近傍に「紫藤瀧」「相生松」との表記があり、現在の認識に近い名称が付与されている。ただし、先にも述べた「滝＋衣掛岩」の基本的構成要素において、滝を「紫藤の瀧」とし、江戸時代以来の「龍王（瀑布）」の認識が欠如している。

ところが、明治33年（1900）の『大日本帝国陸軍陸地測量部二万分の一地形図（旧版地図）「太宰府」』には、天拝山の山麓、荒穂宮の西に「紫藤瀧」の注記がなされており、旧来の衣掛石との位置的なセット関係がなく記載されている。位置的には前資料で「行者瀧」と呼ばれている山中の滝の位置であると考えられ、それまでに同滝を「紫藤の瀧」と呼称してきた経緯もなく、後世になって場所を意図的に転移したとも考えにくいことから、誤記である可能性が想定される。このことは、旧版地図が観光図ではなく、陸軍による総合的な地形測量図としての性格が強いことによるためであると考えられる。

一方で、明治35年（1902）の松尾光淑による『菅公一千年祭紀念 大宰府名所誌』（以下『名所誌』と略す。後掲〔史料7〕）では、非常に詳しい記述がなされている。光淑自身が、菅原道真公を強く信仰していた経緯をふまえれば当然のことではあるが、「○龍王瀑布（りゅうおうのたき） 天拝山下宮の祠前にあり、清浄瀑布（せいじょうのたき）、紫藤瀑布（しとうのたき）とも云ふ。縁起中、菅公此瀑布にて、垢離（こり）し給ひ、天拝山に登り給ふ、其時此瀑布の形勢を漢土の龍門水に比



明治33年『旧版地図』の天拝山周辺

して、龍音水と名付け給ふと、武蔵寺縁起に記せり、瀑布の辺に高き石あり御衣掛石（みころもかけのいし）といふ、是公衣を脱ぎて掛け給ひしものなり、又其傍に古き石塔あり、詩を刻して曰く、

天判峯頭仰彼蒼 願心成満放威光 御衣薫石变成塔 五百年來流水香 正平二十年二月二十五日
願主 大僧都信聰謹題

吉嗣拝山

巍峨菅原鎮青山 松自森々雲自閑 濺洗冤小飛瀑 為公流得響人間」と詳細に記しており、基本的には先述した『武蔵寺縁起』に準じた内容となっている。

菅公没後一千年を記念したという同史料の性格上、菅原道真公に関する伝承記述に最大の注力となされ、その情報が掲載されているのは当然であるが、ややもすると一般の認識として形骸化していた内容についても含めて正確に記している。また、『名所誌』には「相生松」に関することも詳述されており、龍王瀑布の傍にあることや天拝山中腹から移植された経緯についても述べられている。この段階で注目されるのは、「龍王瀑布」の別名として「紫藤瀑布」とも呼ばれている点であり、その由緒を知るよしはないが、「紫藤を瀑布の上りに植ゑ」たとする『武蔵寺縁起』本来の記述、つまり「滝+紫藤」という構図から、「紫藤滝」という固有名詞に変化していることは、注目される。

ただし、その後も観光案内的な位置づけのものについてはその認識は定着せず、明治38年（1905）の『九州鉄道案内』（後掲〔史料8〕）においては、八代線遊覧地における天拝山の記述のなかに、「一に天判山と云ふ。武蔵温泉場より登路二十丁、山上に天満神社あり、菅公を祭る、俗説に、公此山に登りて冤を天に訴へたりと云ふ、山の中腹に小瀧あり、傍らに在る巨石を衣掛石と称し菅公の水浴せらし処なりといふ又大僧都信聰の詩を刻せる碑及び相生の松あり。」とあり、また、明治42年（1909）の『九州鉄道遊覧案内－A guide to noted places by the KYUSHU railway』（後掲〔史料9〕）では、天拝山の項の説明に「天判山ともいふ。（中略）俗説によれば、菅公此山に登りて天に向て冤を訴へたといふが、固より信ずるに足らぬ荒誕の伝説である。或は公武蔵温泉に浴し給へる序、此山に登臨して、風景を賞せられたかも知れぬが、其冤罪を天に訴へたといふは、正史に見えぬ所である。山の中腹に小瀑布がある。傍に屹立せる巨岩は、衣掛石（きぬかけいし）

とて、菅公会て此瀑に打たれ衣を懸け給へる所であるといふ。傍の碑には『天判峯頭仰彼蒼 願心成満放威光 御衣薫石變成塔 五百年來流水香 正平二十年二月二十五日 願主 大僧都信聰謹題』と刻してある。又老松がある。其根は分れて雌雄の二株となる、老幹蟠屈して古色真に愛すべきものがある。土俗が相生の松といふのは、即ち之れである。』とあるのみで、菅公伝説＝小瀑布（瀧）＋衣掛石＋正平塔＋相生松という構成になっている。つまり、ここで武蔵寺の創建に関わる藤原虎麻呂と紫藤、菅原道真公と龍門（龍音）という本来は別々のものであった構図が変化し、菅原道真公と「紫藤」の滝というセットが誕生する。

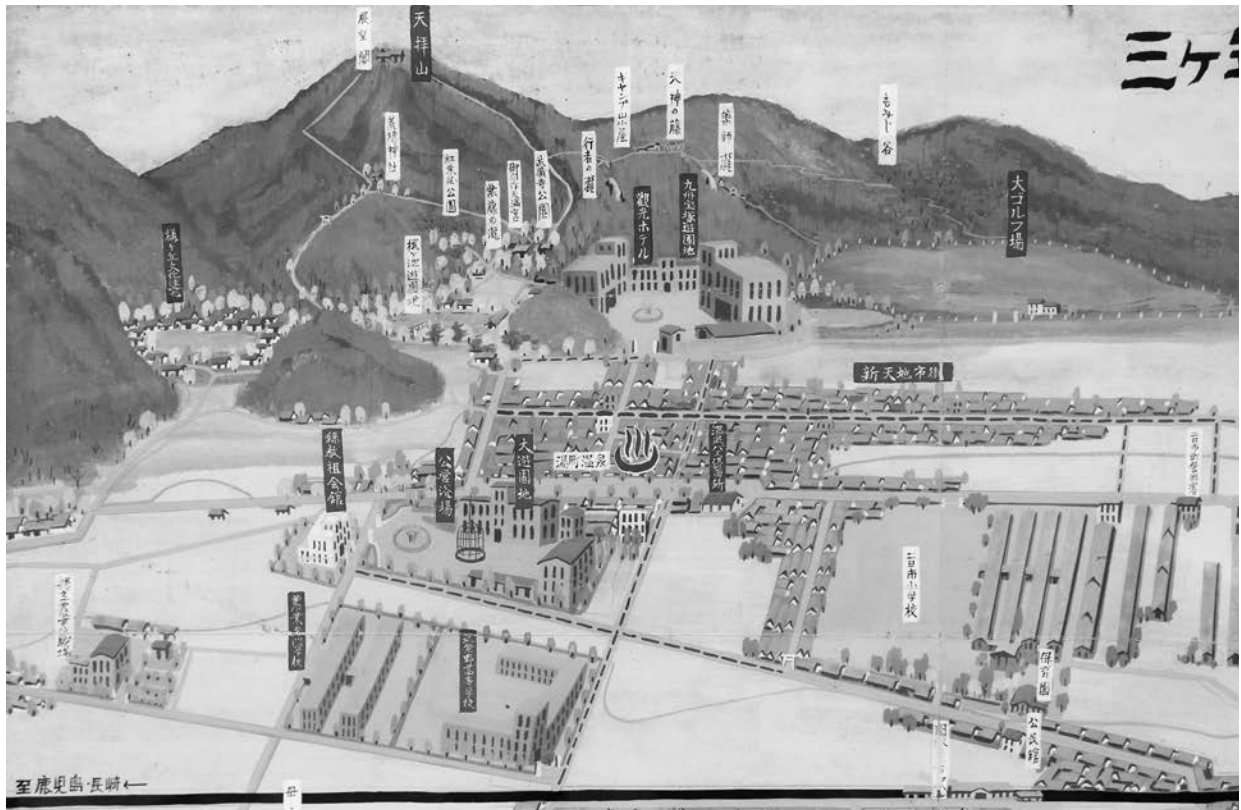
なお、各種資料に滝の名称が明確に述べられていないのは、大正～昭和初期に制作されたと推測される絵葉書における同滝の写真表題に、「武蔵寺の滝と衣掛岩」とされているのも同様である。むしろ、元々注目されていたのは菅原道真公が御衣を掛けたとされる「衣掛岩（石）」の方であって、滝はその傍らにある「滝」という認識でしかない。また、同写真には大僧都信聰による正平20（1365）年石塔が写っているが、塔の基礎部分のみで層塔の上部は写っていない。このことから、何れかに時期に積み直されたものであると推測され、滝の周辺は相当に改変を受けているものと考えられる。



絵葉書「武蔵寺の滝と衣掛岩」（大正～昭和初期） 個人蔵

しかし一方で、昭和4年（1929）の荒井周夫編『福岡県碑誌－筑前之部－』（後掲〔史料10〕）には、天判山正平塔の説明文に「（前略）碑の傍に衣掛け岩あり。龍王瀧（紫藤瀧）あり、菅公此に沐すと云ふ。」とあり、依然として現在の紫藤の滝が「龍王の瀧」という認識も混在していた状況も認められる。このことは、昭和29年（1954）の『二日市町勢要覧』（以下『要覧』と略す。）の説明文にも、「龍王の滝（紫藤の滝）」と「龍王の滝」を本称として記述していることから裏付けられる。『要覧』に所収されている「三ヶ年計画二日市町の構図」という町の将来イメージ図は、その由緒が詳らかではないが、原図は昭和20年代に制作されたものと推測される。同図には、武蔵寺の傍らの現在地に「紫藤の瀧」との表記があり、荒穂神社を經由して上宮（「天拝山」「展望閣」

とある。)に至る正面の登拝道、およそ北西側の別尾根に武蔵寺から遡上する山道が描かれ(現在の天神さまの小径)、さらにその北西の天拝山中腹の谷筋に「行者の瀧」との記載がある。



「三ヶ年計画二日市町の構図」(原図は昭和20年代制作か) 筑紫野市歴史博物館所蔵

4 まとめにかえて

これまでに、いわゆる「紫藤の滝」と呼ばれている天拝山麓の滝を取り巻く名称の表現推移について述べてきた。その推移を図示したのが表1である。要約すると、元文5年(1740)~天明3年(1783)とされる『武蔵寺縁起』並びに『縁起絵図』によれば、「瀑布(瀧)」(菅原道真公伝説:龍音水)+傍らに植えられた「紫藤」(藤原虎麻呂伝説)+「衣掛岩(石)・天神御衣掛(の岩)」(菅原道真公伝説)+中世の「四重(三重カ)層塔」という対象が基本的な構成要素となっており、本来は、別々のものであった藤原虎麻呂伝説と菅原道真伝説とがセットになっていることが特徴である。この際に、『縁起絵図』にある滝の注記が「紫藤カ」となっており、経緯を考慮すれば錯誤か、すでに名称が混在していた可能性を物語っている。

これらの基本認識は、江戸時代を通じて宝永6年(1709)の『本編』、寛政5年(1739)の『附録』、天保6年(1835)の『拾遺』などの地誌にも共通する認識として一貫して記述されている。

しかし、この基本認識が、明治20年代になると菅原道真公の伝説に収斂されていくことが看取できる。「龍王の瀑布・(天拝山の)麓の瀧水」+「衣掛の岩」という構成のみに情報が欠落して変移していく傾向にあり、菅公伝説をその基調としながらも、「紫藤の瀧」とは限定せずに「小瀑布(瀧)」とのみ記載している点は、その後の観光案内本などにも董襲され、この傾向は後の大正~昭和初期に制作された絵葉書にも見受けられる。

ところが、明治30年代になると、「菅公衣掛石」の近傍にある滝が「紫藤の滝」とネーミングされ始め、さらに「相生松」などの表記が追加されようになる。これは、現在の認識に近く、「滝」

＋（衣掛の）「岩」という基本要素に加え、滝を「紫藤の瀧」と称するようになり、江戸時代以来の「龍王（瀑布）」の認識が欠如するようになる。

一方で、明治35年（1902）の松尾光淑のように、『武蔵寺縁起』の記述に準じた非常に詳しい記述を行っているものも存在している。しかし、その場合においても「龍王瀑布（りゅうおうのたき）」の項において、「清浄瀑布（せいじょうのたき）」、「紫藤瀑布（しとうのたき）」と別呼称を併記しており、後の昭和4年（1929）の『福岡県碑誌』、昭和29年（1954）の『要覧』の頃までは、現在の紫藤の滝について「龍王の瀧（紫藤の瀧）」であるという認識が継続しており、両名併記となっているのが一般的であった。

しかし、『要覧』と同じ年に二日市町の町制六十周年記念として発行された『二日市小史』では、武蔵寺境内の古事として「紫藤の瀧（龍王の瀧）」「紫藤の滝又は竜王の滝と呼ぶ。」と記しており、「龍王」と「紫藤」の呼称の優先度が同じ年でありながら混在している。ただし、『要覧』に収録される「三ヶ年計画二日市町の構図」には、「紫藤の瀧」との表記のみとなっていることから、この時期には混在しながらも「紫藤の滝」という呼称が優勢となっている感がある。そして、現代に至っては、「龍王の滝」という名称については、完全に忘れ去られてしまった。

これらの滝の呼称変化の背景を考えると、不安定ながらも明治30年代に一つの画期があるものと推察できる。その前史として重要なのは、明治22年（1889）の九州鉄道開通である。その建設工事は、明治21年1月から1年3ヶ月ほどで博多～久留米間、約35kmの工事を完成させており、博多から、雑餉隈（今の南福岡）、二日市、原田、田代、鳥栖、久留米の各停車場が設けられ、とくに二日市は、地理的に博多と久留米のちょうど中間地点にあたり、古来より交通の要衝であった地理的な特性もあったことから、地元豪商の谷彦一らが協力してその開設に成功したことが、その後の町の発展に大きく寄与することとなっている。

これと軌を一にしているのが、鉄道の敷設によって武蔵温泉（現在の二日市温泉）の開発、近代ツーリズムの流行である。武蔵温泉については、『日本鉱泉誌』には、源泉が武蔵川（現在の鷺田川）の川底14ヶ所から湧出し、17ヶ所に浴場を設け、人家は90戸余があること、御前湯、薬師湯、川湯があることが記載されており、博多の奥座敷として脚光をあびていた。温泉開発は、二日市停車場の開業より俄かに活気を帯び、明治35年（1902）の太宰府天満宮菅公一千年祭に至っては、太宰府と二日市とを結ぶ大宰府馬車鉄道が開通し、明治32年（1899）に駅から湯町への新道（現鳥居町）を開通させ、明治35年（1902）に湯町の入り口に菅原道真を祀る天拝神社に奉納する大鳥居を地元有志が建立するなど、次第に繁栄していく。なお、現在の武蔵寺境内には、「保存寄附表」とした明治32年（1899）の石碑が残されており、これは武蔵寺への寄附者を記したもので、地元の谷彦一・帆足卯平・石橋嘉一・谷理蔵をはじめ、博多の渡辺興三郎らからの寄付金が合計で867円集まっている。その活発化は、温泉街のみならず、周辺にも広がっていった。

この動きとはほぼ同じ時期、菅原道真公が大宰府で没して一千年忌にあたる明治35年（1902）には、菅公一千年祭が挙行されている（日比野2004）。旧福岡藩主黒田家当主黒田長成をはじめ、前田利嗣・副島種臣・東久世通禧らが菅公会に名を連ね、太宰府神社の社殿を修築し、文書館を建設し、梅園を拡張するなど、太宰府神社境内の整備を行っている。また、太宰府神社もその社格が明治4年（1871）の国幣小社から、明治15年（1882）に官幣小社、明治28年（1895）に官幣中社に上昇している。このなかで、江島茂逸・高原謙二郎による『太宰府史鑑』をはじめとする記念出版が相次いでおり、松尾光淑の『名所誌』もこの時に名所案内書として刊行されたもので、菅原道真公が大きくクローズアップされた時期と重なっていた。

資料名及び年代	瀧 龍王瀑布	紫藤	龍音水	紫藤滝 紫藤瀑布	衣掛岩 衣掛石	(滝下の) 神池	三重石塔 (正平 20 年)	相生松
筑前国御笠郡武蔵村椿花山武蔵寺薬師如来縁起 元文 5 (1740) 年～明和 2 (1765) 年の間 (明治 16 (1883) 年頃に書写か)	○ (瀧)	○	○		○			
筑前国続風土記 宝永 6 (1709) 年	○ (龍王瀑布)				○		○	
筑前国続風土記附録 寛政 5 (1739) 年	○ (龍王瀧)				○	○	○	
筑前国続風土記拾遺 文化 11 (1814) 年～天保 6 (1835) 年	○ (龍王瀑布)				○		○	
福岡県地理全誌 (五) 明治 5 (1872) 年～13 (1880) 年	○ (龍王瀧)				△			
汽車乗客便覧—第一編九州鉄道博多久留米間— 明治 23 (1890) 年	○ (龍王ノ瀑布)						○	
九州鉄道旅客の手引 明治 26 (1893) 年	△ (麓の滝水)							
福岡県筑前国筑紫郡二日市町大字武蔵温泉場 及天台宗椿花山武蔵寺境内之図 (銅版画) (『福岡県名所図録図絵』所収) 明治 31 (1898) 年				○	○			○
大日本帝国陸軍陸地測量部 旧版地図 明治 33 (1900) 年				○ (位置誤認)				
菅公一千年祭記念 大宰府名所誌 明治 35 (1902) 年	○ (龍王瀑布)		○	△ (紫藤瀑布) (清浄瀑布)	○		○	○
九州鉄道案内 明治 38 (1905) 年				○ (小瀧) (位置誤認)	○	○	○	○
九州鉄道遊覧案内 A guide to noted places by the KYUSHU railway 明治 42 (1909) 年				○ (小瀑布) (位置誤認)	○		○	○
福岡県碑誌—筑前之前部— 昭和 4 (1929) 年	○ (龍王瀧)			△ (紫藤瀧)			○	○
絵葉書 武蔵寺の滝と衣掛岩 大正～昭和初期				○ (武蔵寺の瀧)			○	
二日市町勢要覧 昭和 29 (1954) 年	○ (龍王の滝)			△ (紫藤の滝)				
三ヶ年計画二日市町の構図 (『二日市町勢要覧』に所収) 昭和 20 年代か?				○ (紫藤の瀧)				

表 1 「瀧」に関する認識の推移

その後も依然として観光ブームは続き、昭和10年（1935）には二日市町公会堂にて筑紫路観光協会が発足している。二日市町、太宰府町、水城村一帯の菅公の遺跡を始め、宝満山や天拝山などの観光地としての宣伝を企図したもので、観光宣伝のために、野口雨情作詩「筑紫小唄」や福田正夫作詞「湯町音頭」などのレコードも制作されている（福岡日日新聞〔以下同じ〕・昭和10年3月24日記事）。

この頃には、国内外各地からの視察や、観光ルートの開発などが盛んで、菅公ゆかりの「天拝山登山」「武蔵寺の藤」「武蔵温泉場（二日市温泉）」などが観光パッケージになっており、門鉄管内のハイキングルートにも「天拝山」と「武蔵温泉」がうかがえる（昭和10年8月18日記事）。また、現在も続いている「天拝山観月会」も大きく取り扱われており、地元は大変な賑わいを見せていった（昭和10年9月13日記事）。

これらの点から、現在「紫藤の滝」と呼称されている滝の名称については、元々は藤原虎麻呂と菅原道真にまつわる別々の伝説として存在し、従来は「龍王瀑布」＞「龍音水」＞「紫藤」という強弱の構図であったものが、明治30年代から昭和初期頃までの近代ツーリズムの影響を受けて菅公伝説がクローズアップされてきたことによって、いつしか「龍王瀑布」≡「紫藤瀧」と曖昧な関係に変化し、後に天拝山における菅公伝説としての「紫藤の滝」としての名称が定着していくことになったという経緯が推測できる。この点は、「天判山」に「天拝山」との山名が付与され、後に「天拝山（天判山ともいう。）」と記述が変化していく明治33年（1900）頃の状況とも同様の背景にあるのではないかと考えられる。

【註】

（1）滝の名に「龍王」という名を冠した由緒については、定かではない。『縁起』には、菅公が「漢土の龍門水に比して、龍音水と名付け」とのみ伝えられる。中国神話において『山海経』のなかに登場し、水を蓄えて雨を降らせる応竜は、南方に住んだとされる。また、中国の洛陽城の南方には「龍門」があり、奈良盆地南方の吉野にも「龍門山」がある。憶測に過ぎないが、都市南方と龍という存在と信仰には関連性がある可能性も想定しておく必要がある。

なお、平城京の二条大路SD5100-6AFIUOZ地区出土の呪符木簡には、奈良の南山に住む九頭一尾の大蛇に疫病（天然痘）の原因である鬼を退治してもらい、都での流行阻止を祈願した旨の九頭龍にまつわるものがあり（平城31-37下609）、古代の大宰府の南方に所在している天拝山を、その南山と見立てたことに依っている可能性もある。今後の検討課題としたい。

【参考文献】

渡邊雄二「武蔵寺縁起絵図と十二神将について」『武蔵寺と二日市温泉』 1998年 筑紫野市歴史博物館
貝原益軒（伊東尾四郎校訂）『増補筑前国統風土記』 1988年 文献出版
加藤一純・鷹取周成（川添昭二校訂・福岡古文書を読む会）『筑前国統風土記附録』 1977年 文献出版
青柳種信（広渡正利校訂・福岡古文書を読む会）『筑前国統風土記拾遺』 1993年 文献出版
福岡県『福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌（五）』 1993年
匹田幸賀『九州鉄道汽車乗客便覧 第一編 博多久留米間』 1890年
岡本武平『九州鉄道旅客の手引』 1893年
松尾光淑『菅公一千年祭記念 大宰府名所誌』 1902年 積善館
九州鉄道株式会社『九州鉄道案内』 1905年
『九州鉄道遊覧案内－A guide to noted places by the KYUSHU railway』 1909年 西山金光堂
日比野利信「太宰府博覧会と菅公一千年祭」『古都太宰府の展開 太宰府市史通史編別編』 2004年

【史料】

〔史料1〕貝原益軒『筑前国統風土記』巻之九御笠郡下 宝永6年（1709）

天拝山（或天判山と云）

武蔵村の上にあり。（中略）世に云伝へ侍へるは、延喜二年菅公、此天判山にのほりて罪なき由を、天にうつたえさせおはしましければ、天帝より天満大自在天神といふ尊号を下し給ひしとかや。〈或勅号とも云。又は神託ともいふなり。〉菅公の天を拝し玉ひし所、則此御社の地なり。石の上にのほりて天を拝し玉ひけると云。其石を天拝岩と号し、御社の内にあり。此故に天拝山と号す。（中略）

龍王瀑布

武蔵寺の側にあり。其傍に高さ石たてり。是を衣掛岩と云。菅亟相此瀑にうたれ玉ふ時、衣をかけ給ひし石とかや。たきの下、川の中に、石塔あり。詩を彫付たり。 天判峯頭仰彼蒼 願心成満放威光 御衣薫石變成塔 五百年來流水香 正平二十年二月二十五日 願主 大僧都信聰謹題

〔史料2〕加藤一純・鷹取周成『筑前国統風土記附録』卷十一御笠郡中 寛政5年（1739）

天判山并天満宮（天拝とも書り。麓より山上に登るに道二筋（二本松・荒穂）あり。社僧を円智坊といふ。）

本編（一九四）に詳也。山上の天満宮ハ天拝岩をもて神体とす。（中略）

龍王瀑布并衣懸岩

此瀧の下、神池の中に三十（重カ）塔立り。皆本編（一九五）に見えたり。

〔史料3〕青柳種信『筑前国統風土記拾遺』卷之十八 文化11年（1814）～天保6年（1835）

天満宮二祠并龍王瀑布

天判山の頂に一祠有。天拝石を以て神体とす。（中略）社司を圓智坊（太宰府検校坊に属す）といふ。社内に稲荷社及三重堂あり。又社前に龍王瀧、衣掛岩及び正平二十年に詩句を彫れる石塔有。〈共に本編に見へたり。〉塔の願主信聰は宰府小鳥居の族弟也。〈小鳥居系図に別当法師信禪の弟二人信聰本月挂岸和尚 知信東福寺義堂和尚とあり。〉

〔史料4〕『福岡県地理全誌（五）』卷之一百十 御笠郡之八 武蔵村

明治5年（1872）～13年（1880）

○瀑布

龍王瀧

天拝山ノ麓。新天神ノ社前ニアリ。紫藤ノ瀧共云。高一丈余。幅一間。水源天拝山ノ内。杉谷ヨリ出。流末湯町川ニ入ル。

〔史料5〕匹田幸賀『九州鉄道汽車乗客便覧 第一編 博多久留米間』 二日市駅 名所名跡の項 明治23年（1890）

○龍王ノ瀑布 武蔵寺ノ側ニアリ菅神衣掛ノ岩アリ。

〔史料6〕岡本武平『九州鉄道旅客の手引』 明治26年（1893）

天拝山は停車場を去る凡三十町二日市村大字武蔵にあり。龍門山と相對して有名なり。山嶺にて一本の大松あるを以て、天氣朗なる日は数里の外よりも此山を認むること易し。此山は即ち菅公の左遷され玉ふ時、麓の瀧水にて行えおなし山上の石に登りて天を拝して其罪なきを訴へ玉ふたる所なれば、後世天拝山の稱を呼ぶと云ふ。山路稍険なれども登臨すれば遠近の山野眼下に歴々として遠く博多灣の水を望み、絶景亦た宝満山に劣らざる者あり。山の麓に温泉場あり。武蔵の湯亦たは湯町の温泉と云ふ。

〔史料7〕松尾光淑『菅公一千年祭紀念 太宰府名所誌』 明治35年（1902）

龍王瀑布（りゅうおうのたき）

天拝山下宮の祠前にあり、清浄瀑布（せいじょうのたき）、紫藤瀑布（しとうのたき）とも云ふ。延喜中、菅公此瀑布にて、垢離（こり）し給ひ、天拝山に登り給ふ、其時此瀑布の形勢を漢土の龍門水に比して、龍音水と名付け給ふと、武蔵寺縁起に記せり、瀑布の辺に高さ石あり御衣掛石（みころもかけのいし）といふ、是公衣を脱ぎて掛け給ひしものなり、又其傍に古き石塔あり、詩を刻して曰く、

天判峯頭仰彼蒼 願心成満放威光 御衣薫石變成塔
五百年來流水香 正平二十年二月二十五日

願主大僧都信聰謹題

吉嗣拝山

巍峨菅廬鎮青山 松自森々雲自閑 濺洗冤小飛瀑
為公流得響人間

相生松（あいおいのみつ）

龍王瀑布の傍にあり、其由来を尋ぬるに、天拝山の半腹に、陸松一株あり、地を出ること一尺余にして、双股となり、相對して高数丈あり、里人名付けて二本松といふ、文政五年大雪の数日一股遂に圧折す、依つて領主立花氏は是を荒穂神社（天拝山の中腹にあり）の祀官、松崎久満に與ふ、久満人をして枝葉を採らしめ、其幹を村民に與ふ、村民に又次と云ふ者あり、之を伐採せんとす、松樹已に枯槁すること久し、忽ち鱗殻の間に、二芽を生ず、長すること各五寸余、又次大に驚き熟視するに、雄雌相對せり、益以て奇とし、鋸して一段とし、背負ひて山を下り、天拝山下宮の祀官、圓智坊快憐に示す、快憐感賞し求めて止まず、又次是を許す、快憐即此地に植ゆ、江湖相伝えて奇端とし、近邑の里正等相謀り、画人秋圃をして之を画かしめ、藩主黒田侯に呈す、侯も亦之を奇とし画工をして再び写さしめ、珍藏せらるると、今は年を経ぬること八十年、相生の縁いよいよ深く、千歳を争へり、世人仰ぎて神木と稱するも、故なしと謂ふ可かへず、

〔史料8〕九州鉄道株式会社『九州鉄道案内』（明治38年〈1905〉）八代線 遊覧地の項

天拝山 一に天判山と云ふ。武蔵温泉場より登路二十丁、山上に天満神社あり、菅公を祭る、俗説に、公此山に登りて冤を天に訴へたりと云ふ、山の中腹に小瀧あり、傍らに在る巨石を衣掛石と称し菅公の水浴せらし処なりといふ又大僧都信聰の詩を刻せる碑及び相生の松あり。

〔史料9〕西山金三郎『九州鉄道遊覧案内－A GUIDE TO NOTED PLACES BY THE KYUSHU RAILWAY』（明治42年〈1909〉）門司、人吉間 二日市駅の項

◎天拝山 天判山ともいふ、武蔵温泉の西南に峙つ、二日市村大字武蔵より登路二十町、又一路があり、山口村大字古賀より十六町許にて山頂に達す。山上にある天満神社は、菅公の霊を祭ったものである。俗説によれば、菅公此山に登りて天に向て冤を訴へたといふが、固より信ずるに足らぬ荒誕の伝説である。或は公武蔵温泉に浴し給へる序、此山に登臨して、風景を賞せられたかも知れぬが、其冤罪を天に訴へたといふは、正史に見えぬ所である。山の中腹に小瀑布がある。傍に屹立せる巨岩は、衣掛石（きぬかけいし）とて、菅公会て此瀑に打たれ衣を懸け給へる所であるといふ。傍の碑には「天判峯頭仰彼蒼 願心成満放威光 御衣薰石變成塔 五百年來流水香 正平二十年二月二十五日 願主 大僧都信聰謹題」と刻してある。又老松がある。其根は分れて雌雄の二株となる、老幹蟠屈して古色真に愛すべきものがある。土俗が相生の松といふのは、即ち之れである。

〔史料10〕荒井周夫編『福岡県碑誌 筑前之部』（昭和4年〈1929〉）口絵

天判山下正平塔

碑は筑紫郡二日市町武蔵に在り。天判山今は天拝山と称す。昔菅公此の山に登り、天に祈りて冤を伸ぶと云ふ。碑の傍に衣懸け岩あり。龍王滝（紫藤滝）あり。菅公此に沐すと云ふ。

天判峯頭仰彼蒼

願心成満放威光

御衣薰石變為塔

五百年來流水香

正平二十年〈乙巳〉二月二十五日

願主権大僧都信聰謹題

（おがの・あきら 筑紫野市教育委員会文化財課長 兼筑紫野市歴史博物館長）